

Ⅲ－1

桜美林学園の創立と展開
創立期の桜美林学園

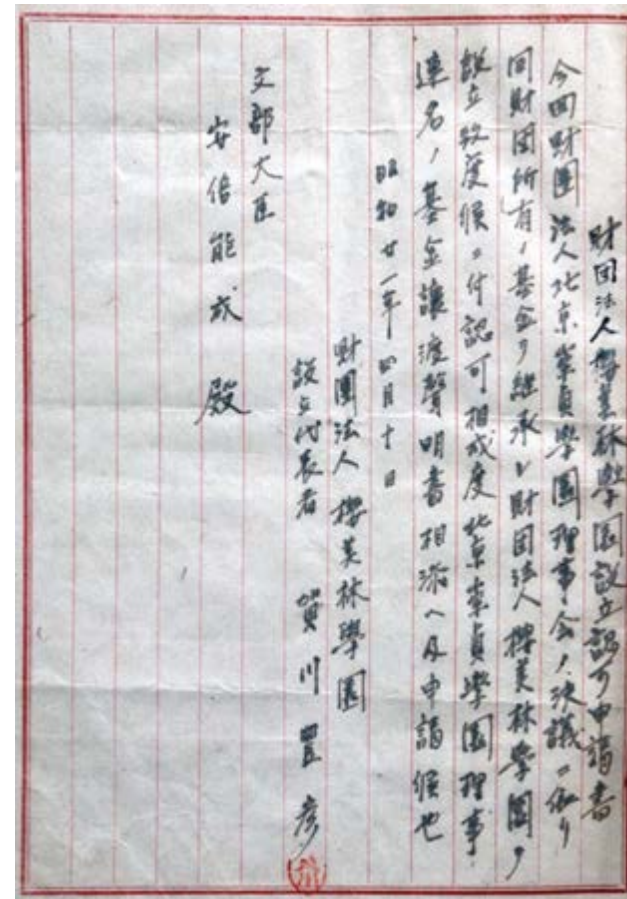
学園の創設

1946年3月15日に中国を離れた安三と郁子は、22日に東京駅に到着した。翌日、安三は神田で賀川豊彦に出会い、農村に入って学校を経営したいと語ったところ、手頃な土地と建物があると紹介されたのが、片倉組が所持していた元 相模陸軍造兵廠の5棟からなる寄宿舍であった。3月24日、安三と郁子は現地に足を踏み入れたが、建物は荒れ放題の廃屋であった。丹沢連山の彼方に富士山の頂が少しだけ見える風景に得難いものを感じ、帰国後1週間足らずで、現在地に学校を設立する決心をした。二人がともに学んだオーバリン大学を想い、郁子が「オービリン」と、安三が「桜美林」と漢字をあてて、学園名を決めた。そして、道路を挟んで向かい側に広がる小高い丘陵地に崇貞学園の復活の意を込めて、「復活の丘」と命名した（現在多くの校舎が建っている地）。直ちに、崇貞学園の財産の移管と学園の法人化の手続きを進めた。4月10日、設立代表者 賀川豊彦の名で「財団法人桜美林学園設立申請書」を文部省に提出、5月29日認可された。賀川は理事長に、郁子は学園長に就任した。また、賀川は、財政的な面でも学園を積極的に支援した。学園は1946年秋「キリスト教学校教育同盟」に加盟した。



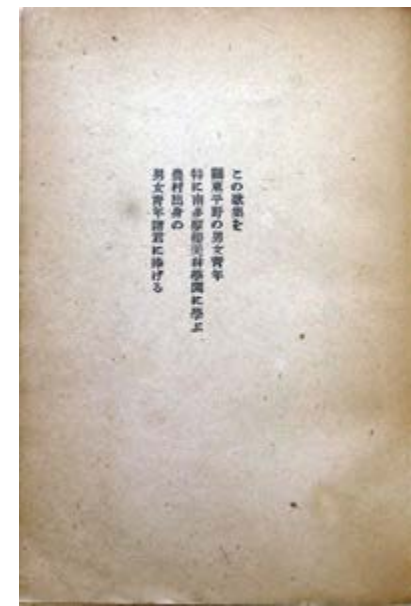
■ 初代理事長 賀川豊彦

賀川豊彦（1887.7.10–1960.4.23）は労働運動、消費者組合運動、農民組合運動の指導者としても知られるキリスト者。安三とは中国時代から交流があった（9頁参照）。理事長在任期間：1946年5月29日～54年1月31日。

■ 中国から引き上げてきた時のいでたちで雪の町田街道に立つ安三と郁子
後方の建物は校舎の一部。リュックサックとスーツケースはその後の募金活動の際にも使用された。撮影は1947年頃と推測される。

■ 財団法人桜美林学園設立認可申請書（写し）、設立代表者 賀川豊彦から文部大臣 安倍能成あて（1946年4月10日付）

賀川豊彦が設立代表者として「財団法人」の申請を行った。同年5月29日に認可。1951年、「財団法人」から「学校法人」に改組した。

■ 崇貞学園の財産を桜美林学園に譲渡する許可文書、外務大臣 吉田茂から崇貞学園理事長 清水安三あて（1946年5月29日発令）
『朝陽門外』の印税など日本の銀行に凍結されていた崇貞学園の預金などの財産を桜美林学園が譲り受ける手続きが取られた。

■ 賀川豊彦の歌集『銀色の泥濘』の表紙（左）、中扉（中央）、奥付（右）

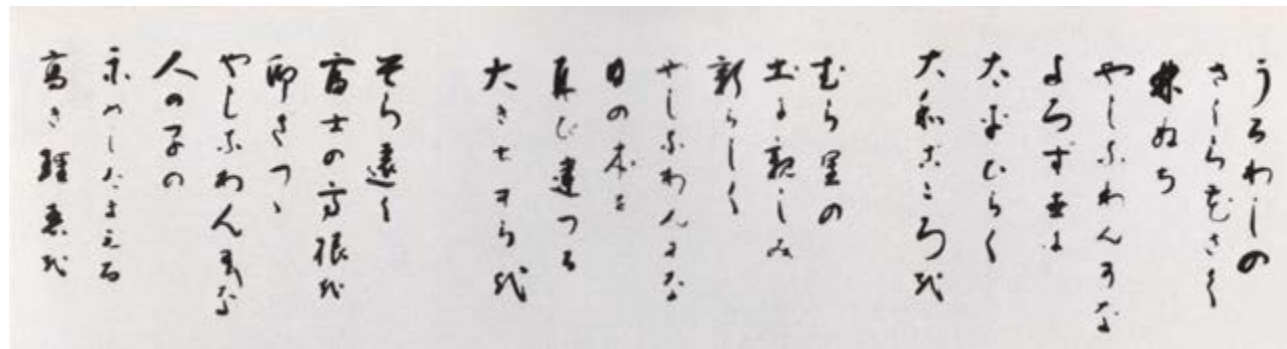
賀川は、中扉に「この歌集を特に南多摩桜美林学園に学ぶ男女青年諸君に捧げる」と記し、印税の全額を学園に寄付した。本書発行の「桜美林学園出版部」は、創立間もない頃学園内に設置され、学内の印刷物を制作していたが、1953年の火災により印刷機器活字一式を焼失した。（1949年5月1日桜美林学園出版部発行）

Ⅲ－1

桜美林学園の創立と展開
創立期の桜美林学園

急ピッチで進められた学校設置

学園は1946年4月25日、東京都を通じて高等女学校の設立認可の申請をしたが、認可は5月5日の開校式までに得られなかった。安三、郁子は「認可申請中」と添え書きをして生徒募集を実施する一方、教員集めに奔走し、11名の教師陣でスタートすることとなった。当時、学園付近に中等学校がなかったためか、4月中旬にはすでに200名以上の応募者が続出した。椅子や机などを急遽集め、急ピッチで入学者を迎える準備を整えた。しかし、窓ガラスは割れたままで、校舎は依然荒れ放題の様相であった。そのような中で開校式が挙行されたが、開校式に集まった生徒は214名であった。式では、理事長 賀川豊彦を迎え、讃美歌を歌い、さらに安三が作詞した学園歌を合唱した。また、式後集まった保護者、生徒全員で校舎を清掃して、学び舎を整えたという。5月29日、財団法人桜美林学園、同学園高等女学校・英語専攻科の認可があり、学園は制度的に整えられた。翌1947年に中学校（校長 郁子）、48年高等学校（校長 郁子）、50年短期大学・英語英文科（学長 安三）と設置校を拡大していった。



■ 開校式で歌われた学園歌

作詞者は清水安三であったが、曲は「海ゆかば」（信時潔作曲）。1953年に現在も歌われている学園歌（作詞：清水安三、作曲：小川留三）ができるまで用いられた。

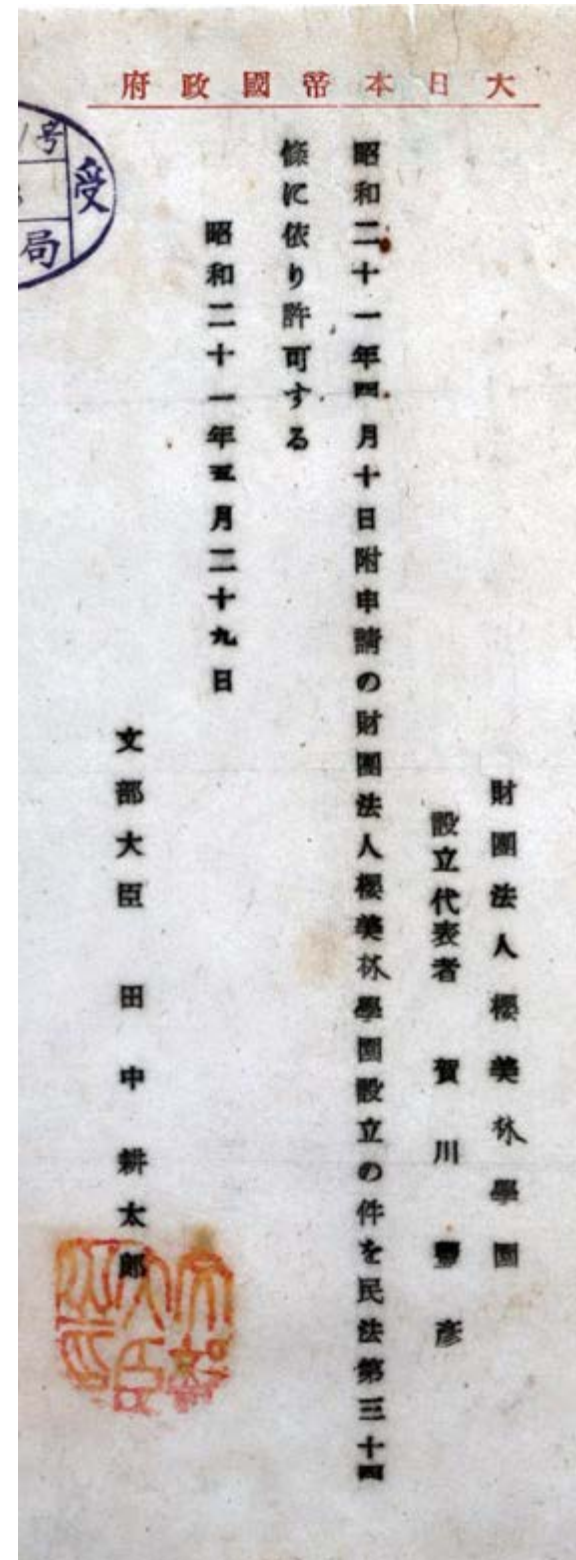


■ 高等女学校1年生として入学してきた生徒たち



■ 創立当時の教員たち

教員は引揚者や中国時代の知り合いが多く、建物（校舎）の2階部分の寮で生活していた教員も少なかった。前列右から3人目が郁子、隣りが安三。

■ 桜美林学園設立認可証、文部大臣 田中耕太郎から設立代表者賀川豊彦あて（1946年5月29日認可）
同日、高等女学校・英文専攻科も認可された。

■ 校舎外観

2階建ての5棟の1階部分を教室、2階部分は教員寮・学生寮として活用していた。安三、郁子も寮に住んで、学生の生活指導を行っていた。



■ 校舎出入口と生徒たち

当時の校舎は、壁が落ちていたり、ガラス戸がないなどといった状況であった。



■ 看板の前に立つ郁子と安三

看板には短期大学、家政科の文字も見えることから、1955年頃の撮影と推測。

Ⅲ－1

桜美林学園の創立と展開
創立期の桜美林学園

校地・校舎確保のための募金活動

学園は、創設後短期間に設置校を急速に拡大していったが、それに伴う経営資金、特に校地・校舎・教育施設の整備が緊要な課題となった。そこで、安三は『希望を失わず』を上梓し同書を携えて国内の教会を巡り、講演をしながら売り歩いた。さらに校舎建築資金などを得るため、1951年3月から53年3月の丸2年間、ハワイ・北米、加えてブラジルまで足を伸ばして海外での募金活動を行った。途中、郁子も1952年2月に渡米して、約1年間北米での募金活動に参加し、53年3月帰国した。安三、郁子が不在中、第1回短期大学の卒業式が挙行されたが、理事たちの応援を得るなどして実施された。海外の募金活動により、寄付金の他、タイプライター・本・ピアノなどの物品も学園に寄贈された。学園では、1957年、「復活の丘」（通称）にコンクリート校舎が建設され、59年にはチャペル（荊冠堂）竣工、同年スクールバスの運行実施などと、教育環境を整えていった。



■ 1950年頃の桜美林学園の学校案内

A3版ほどの両面印刷。短期大学（英文科）から中学校までの学校案内を記載している。



■ “The Story of Obirin”の表紙

海外募金活動のために編纂された。内容は『希望を失わず』の要約英語版。
(1951年7月25日桜美林学園出版部発行)



■ サレンバーガー (Sullenberger) 夫妻帰国に際しての感謝会での夫妻と安三

厚木ベースのチャレン、サレンバーガーは毎日曜のベースの教会での献金に自身の献金も加え、帰国時に学園に寄附した。夫妻らの献金により、学園は「復活の丘」に5,000坪の土地を初めて購入した。



■ 将来の校舎図

左から図書館・チャペル・短大校舎など英語で説明されている。“The Story of Obirin”のグラビア。その他の当時の海外募金のためのパンフレットなどにも掲載されている校舎建築予定図。



■ 清水安三「親愛なる桜美林の皆様へ」(部分) 『桜美林タイムス』9号、発行所桜美林学園(1951年7月15日発行)

同記事は同年6月9日にハワイから発信した書簡(部分)であるが、安三は、ハワイでの募金の様子の他、本5,600冊・タイプライター5台・古着などを日本に送った旨を記している。安三は旅先から度々、学園の学生・生徒たちに向けて、渡米中の様子を発信していた。『桜美林タイムス』の創刊は1950年9月。



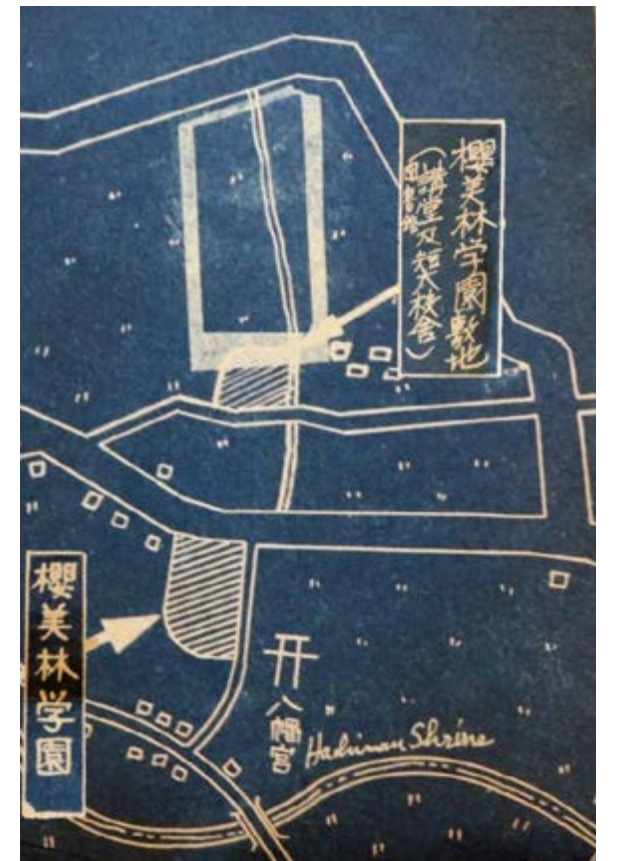
■ “Gift from Atlanta Public Library”と貼られた書架の前に立つ郁子と教職員

海外募金活動により、個人や団体から多数の書籍が寄贈されたが、その一例と推測される。



■ 建設用地の看板と安三(1956年8月)

1956年8月、「復活の丘」に初めての地入れが行われた。



■ 校舎建築予定地の図面(一部)

当時の校舎の位置から町田街道の向かいの土地、いわゆる「復活の丘」に図書館・講堂・短期大学の建築予定地を示した図面。